母子画に関する諸研究の概観

藤井優子*・山根　望**・河合可南子**
切田祐子*・澤谷拓哉*・平峯朋子*・名島潤慈

A Review of Mother and Child Drawings

Yuko FUJII *, Nozomi YAMANE **, Kanako KAWAI **
Yuko KIRITA *, Takuya SAWATANI *, Tomoko HIRAMINE *, Junji NAJIMA

(Received September 25, 2009)

はじめに

心理アセスメントや心理療法の場面において用いられる投映法の１つとして、母子画(Mother and Child Drawings) が挙げられる。これは、Gillespie (1989) が考案した対象関係論を理論的背景とする描画法であり、「お母さんと子どもを描いてください」という教示のもとで実施される。

Gillespie (1989) は、母子画によって対象関係のなかの自己や早期の母子関係について知ることができ、さらに母子分離のレベルを測ることもできるとしている。また、Gillespie (1994) は、母子画には描いた人の自己認知や他者の受け止め方、他者との関係様式が反映されると考え、自己の体験と重要な人物との関係を通しての体験の両方についてのメッセージを伝えるものとして検討できるとしている。

母子画の基礎的な研究は、Gillespie (1994) の著書である *The Projective Use of Mother and Child Drawings* に示されている。彼女はまた、体重減量プログラムに参加した、青年期から中年期までの富裕層の女性たちを対象として、摂食障害と肥満を併せ持つ当事者が描いた自画像と母子画について研究している (Gillespie, 1996)。それによると、摂食障害と肥満の女性たちが描いた母子画は、描画が全体的にはっきりとせず、体の線が貧弱であることや、母親と子どもとが非常に似ているという、幼い子どもが描く母子画と共通する特徴を持つことが示された。

ところで、Gillespie が母子画を提唱して現在まで、母子画についての研究は調べた限りでは10本であり、現時点では母子画に関する研究はわずかしかなされていない。したがって、実際の臨床場面での使用の報告もごく少ない。本論文では、母子画のこれまでの研究について概観し、今後検討すべき事柄について考察することを目的とする。

１．母子画の基礎的研究

馬場 (2005) は、母子画を精神力動的な心理療法を前提にした心理アセスメントの手段として大いに期待できる技法であるとし、日本で最初に母子画の基礎的研究を行った。具体的に言えば、４年制・短期大学生597名を対象に、鉛筆（３B）と横向きにしたA４判の白紙に、「お

＊山口大学大学院教育学研究科　＊＊山口大学大学院東アジア研究科

母さんと子どもの絵を描いて下さい」と教示した。さらに、描画後に「あなたの描いた子どもの性別は」「子どもは何歳くらいですか」「母親は何歳くらいですか」「親子は何をしているところですか」「子どもは何を考えていますか」「母親は何を考えていますか」「母親と子どものどちらに親しみを感じますか」という質問をすることが特徴である。

集めた母子画を分析した結果、母子画の基本的パターンとして、①母親像と子ども像が正面を向いて手をつないでいる絵、②母子像の表情はともに笑顔である絵という２つが見出された。

馬場はまた、母子画と成人版愛着スタイル尺度、構成的文章完成法、東大式エゴグラムを同時に行っている。その結果、以下のような母子画の解釈仮説が提案された。

⑴　母子像の形態：①全身が標準。顔のみの母子像を描く人は母親からの安定した養育体験が乏しく、他者への共感的な態度が持ちにくい。②大きい母子像を描く人は母親から共感的な思いやりのある態度で育てられ、それに基づく自尊心や活動性の高さがみられる。③小さい母子像を描く人は自分にも他者にも共感的になれない。

⑵　母子像の表情：①母子ともに笑顔である場合、他者への信頼感や相互依存的・親和的関係を期待する内的作業モデルが存在する。②母子ともに笑顔でない場合、不快な感情を否認しないで表現できる人である。③母子ともに顔が空白である場合、他者からの非難を否認すると同時に、自分の攻撃性にも向き合わない。④母親像は笑顔であるが子ども像は笑顔でない場合、検査協力者の心的世界が、快感情と不快感情が混在した不安定な状態にあると解釈できる可能性がある。

⑶　母子像の身体接触：表情が一致していると同時に身体接触が描かれる場合は、基本的に安定した養育環境に育っており、自他への信頼感や肯定的な感情が育まれている。

⑷　アイコンタクト：母子がお互いを見合っている場合、豊かな相互的・循環的交流を体験し、母親の養育的態度を取り入れている。

この他にも、母子画の基礎的研究には早川(2006)の研究がある。彼は母子画をDBM(Drawing of a Baby and its Mother）と称し、女子大生137名を対象として研究を行った。そこでは、教示を「赤ちゃんとその母親の絵を描いて下さい」とすることにより、描かれる赤ちゃんと母親の関係性を明確化した。また、内在化された対象関係が投影されやすい描画法の可能性を検討するため、仮説を、１歳から２歳児の子どもとその母親から表出される母子像が調査協力者本人の内的表象を投影する、とした。分析の結果、典型例として、①母親が子どもを抱擁し、②母親は笑顔で子どもは笑顔か寝顔、③母親は上半身か全身で子どもはほぼ全身、という、３つが表現された母子像が得られた。

２．母子画の発展的な研究

本節では、母子画の発展的な研究を次の３つにわける。１つ目は、母子画の描画特徴を示した研究、２つ目は母子画に描かれた内容を質問紙調査の結果と組み合わせて検討した研究、３つ目は母子画を補助的に用いて質問紙調査の結果を検討した研究である。

１つ目の、さまざまな属性の人による母子画の描画特徴を示した研究としては、馬場（2005）、南里・谷（2006）が挙げられる。

馬場（2005）は、学生群（570名）と精神障害者群（78名）の母子画を比較し、その描画特徴を検討した。精神障害者群は、妄想−分裂態勢にあると考えられる統合失調症、非定形精神病、境界性人格障害の患者33名（S群）と、抑うつ態勢にあると考えられる神経症、強迫性障害などの患者45名（N群）である。その結果、①S群は母子ともに顔のみの描画が多く、母親像

と子ども像の表情が一致しない。②S群では母子ともに笑顔の描画でも母子の接触・アイコンタクトがないものが多く、結果的に不安が切り離された状態にある。③N群では、母子ともに空白の顔が多く、ともに笑顔という像は少ない。④S群・N群とも対人関係が「良好」「やや良好」と評価される母子画が少ない、といったことが示された。

さらに馬場（2005）は、非行少年の母子画の研究もしている。対象はある少年鑑別所に入所した187名であり、対照群は学生群（570名）であった。その結果、①母子ともに顔のみであったり、何かに隠れていて全身が見えなかったりするものが多い。これは1人の人間としての他者に向き合うことができないという非行少年の表象の特徴である可能性がある。②小さな母子像が多い。これは豊かな母親の愛を受けた体験が乏しく、自信がなく人間不信になりやすいという非行少年の特徴を示す。③母親像より子ども像が大きく描かれることが多い。これは、非行少年の自我の未熟さと虐待体験などによる傷つきの大きさ・強さを表す可能性がある。④子ども像と母親像とのバランスを見て解釈を行うことが必要。⑤母子がともに笑顔であっても接触やアイコンタクトがない描画が最も多い。これは、人を避けようとしながらも離れることへの不安から周囲に迎合する非行少年の心的世界を象徴している、といったことが示された。

また、南里ら（2006）は統合失調症患者を対象にして、「赤ちゃんとそのお母さんの絵を描いてください」という教示で母子画を実施した。その結果、以下の2つのことがわかった。まず、統合失調症患者の描画では、脅威、怒り、不満、排除など、本来母親が子どもに提供するものとは異質なものが表現される。このことから、統合失調症患者の心の中に、統合失調症患者が必要としていると考えられる、子どもの不安や不満感について十分考えることのできる母親像がないということである。次に、母子画を解釈する際に転移・逆転移の観点を取り入れることで、解釈の幅が広まることや、患者が治療者を始めとした人間関係の中で、体験しやすい感情や人間関係の持ち方を予測することができる、ということである。

2つ目の、母子画に描かれた内容を質問紙調査の結果と組み合わせて検討した研究として、松下・石川（1999）、馬場（2003）、斎藤（2008）が挙げられる。

松下ら（1999）は、母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連を研究した。この研究では、母性意識を「母性性がどのような形で自覚されているかということ」とされた。調査対象は、将来母親になると予想される女性（中学生86名，大学生182名）で、過去の体験としての対人関係や、結婚や母親になることへのイメージなど、母性意識に関する質問紙調査と母子画を行った。母子画は鉛筆（B）で八つ切り画用紙に描いてもらい、その裏に絵についての簡単な説明と「主に母と子のどちらの気持ちにより近い立場で描いたか」を記述してもらった。分析の結果、母子画は単純に母性性を描き出したものではないことが示唆された。

松下ら（1999）はまた、母子画における対象イメージの学齢段階での変化を検討した。対象は小学生112名（男子61名，女子51名）、中学生178名（男子89名，女子89名）、大学生92名（男子40名，女子52名）であった。ここでは、描かれた母親像と子ども像の大きさについてmmで実測し、学齢ごとの差異を検討した。その結果、①子ども像対母親像の相対的な大きさは、大学生において比率が小さくなる傾向があった。②母子像間の距離は、例えば、大学生では実際の生活では距離が離れてくるにも関わらず、母子画のなかではその距離が近く描かれるなど、学齢が上がるにつれて現実の母子関係との間に明らかな隔差がみられた。

ところで馬場（2003）は、大学生を対象に「母子画には個人の対象関係が投影される」という仮説を検証するために成人版愛着スタイル尺度を用いて個人の内的作業モデルを測定し、それが母子画にどのように表現されるかを検討した。成人版愛着スタイル尺度の分析の結果、①

自他への不信が強い“anxious”因子、②他者との相互依存性や親和的関係が強い“secure”因子、③他者を回避する傾向が強い“avoidant”因子という３つの因子が得られた。これらの因子と母子画の内容を検討した結果、次の３つが示された。① secure 高群の女性に身体接触を描く人が多かったため、母子画における身体接触は他者への信頼感の指標と言える。一方、高群の男性の描画は母親像と子ども像の間に何らかの相互関係がみられることが多かったため、愛着対象からの一貫した応答のある養育を受けた結果、他者との心地よい親和的関係を期待する内的作業モデルが形成されていた。② avoidant 高群の女性は、母親像が子ども像以外のことを考えているとみなす人が多く、他者回避経験によって「愛着対象は自分に関心がない」という内的作業モデルが形成されていた。③ anxious 高群の女性は、描いた母子像のサイズが小さい。自他への不信が強いと自分が愛される存在であるという確信をもてず、自尊心を育てることがむずかしい。

一方、斎藤（2008）は、母子画がアセスメントの手段として有用性があることを示すため、女子大生217名を調査対象として、質問紙との併用分析を行った。その結果、①母子画からは表情や母子像の大きさ、アイコンタクト、身体接触を見ることで、単に二者関係のみならず基本的信頼関係が見出されること、②母親像に描かれるものからは女性性、子ども像から得られるものとしてアイデンティティの問題が見出されることが示された。

また斎藤（2008）は、母親と子どもの描く母子画は同じようなものとなるのではないかと仮定し、幼稚園年長児66名とその母親55名を対象として調査を行った。その結果、母と子が描く母子画はほぼ似通っており、質問紙との分析からは、保護的な養育体験が高い母親ほど母子像のサイズを普通・大きいサイズで描くことがわかった。また、母親の養育態度の統制的態度が低いほど、子ども側が描く母子画はアイコンタクトなく描かれるという結果を得た。

また質問紙では、養育態度と被養育体験、育児ストレスの３側面が、母親による母子画のみならず、子どもの母子画にも投影されることが示唆された。

３つ目の、母子画を補助的に用いて質問紙調査の結果を検討した研究としては、塩崎（2005）、鴫原（2009）が挙げられる。

塩崎（2005）は、保育者の研修場面を用い、保育者の母子分離観が保育に与える影響を検討した。対象は保育士33名（女性）で、①母子画とその描画に関する質問、②保育における母子分離場面での、母親と子ども、保育者自身の気持ちとそのときの対応の自由記述、③気になる子どものアンケートを行った。母子画を用いた分析の結果、母子の距離が適度に保たれた母子像や、母子に接触の可能性がない母子像を描く場合、母子分離場面における母親の気持ちには否定的な感情のみの記述が多いということが示された。

塩崎の研究は、研修という場で保育者が自分自身を見つめなおすことを目的として行われたという点が特徴である。この研究の結果、①母子画には保育者のもつ母子関係のイメージや、保育者が母子の関係にいかに関わりたいと考えているかというイメージが反映されること、②母子画にはより深いレベルの、あるいは発達的に早期の対象イメージが反映され、保育者が各々の描画内容について内省することが最も重要であるということがわかった。

鴫原（2009）は、乳幼児を持つ母親の育児不安について明らかにすることを目的とした研究を行った。そこでは、母子画、父親の育児参加や母親の自己肯定感、成人版愛着スタイル尺度と育児不安尺度の比較が行われた。母子画を用いた分析の結果、次の３つのことがわかった。①母親像を大きく描く母親は自己主張が強く、活動的であると考えられ、その夫は育児に参加している。②母子像間に身体接触が描かれないと、その母親は成熟した自我と自己の内なる子

どもが一致していない状態であり、母親自身が不安定であるために育児不安が強くなる。③母子のどちらかが一方的なアイコンタクトを送る絵を描く母親は、成熟した母親である内的自己と自己の内なる子どもの情緒的な交流が乏しいと推察され、育児不安が高い。

3．母子画の臨床的研究

本節ではまず馬場（2008）の臨床場面で母子画を用いた研究について述べ、次に馬場（2009）の、動的母子画の研究について述べる。

まず、馬場（2008）は、①インテイク面接時、②心理療法開始から５年後、③心理療法の終了時という計３回にわたって母子画を実施した１事例を報告し、心理療法過程と母子画の変化について検討した。その事例では、クライエント（以下，Ｃlと略す）の内的世界が、自分を混乱させる情報を聞き流したり、よい意味でのアドバイスを受け入れられるように変化していくのと並行して、母子画の描線も短いが直線的でつながったものになり、その後さらに長く引かれた描線へと変化した。また母子像のサイズは、２枚目、３枚目では母親像の方が子ども像より大きくなった。このことについて馬場は、Ｃlの母子画のサイズは、傷つき体験の大きさや自我の未熟さを示していたのではないかと述べている。また、特に２枚目、３枚目を描いたときのＣlの様子から、日常的な対人関係の問題を扱う中でＣlの自己イメージが改善されたことや、Ｃlの自我が適応的に機能していることが母子画のサイズに示されたと考察した。母子の身体接触については、３枚目の描画で初めて子どもが２人描かれ、１人が母親と手をつなぐという変化が見られた。Ｃlは１枚目の時点では人間不信の状態であったが、３枚目では他者を肯定的にとらえるようになっており、馬場は、手をつなぎながら歩く子どもはＣlの能動的な姿勢の表れであり、Ｃlの自立を示唆するものと考察した。

以上の結果から馬場は、心理療法過程で実施した母子画の変化を検討することによって、対人関係のイメージや他者への信頼感の様相を確認することができれば、その後の心理療法の指針になるとまとめている。

次に馬場（2009）は、母子画に動的要素が加えられれば、母子の関係性がさらに豊かに表現され、検査協力者をより理解することができるのではないかと考え、動的母子画の研究を行っている。そこでは、学生を対象に「お母さんと子どもが何かしているところを描いてください」と教示し、その結果を（従来の）母子画と比較した。その結果、動的母子画では、①母子像の形態は、何かに隠れて全身が見えていないものが有意に多い。②母子の行為については、遊んでいるところが最も多い。これらのことから、動きを含んだ教示を与えることは、想起される場面が母子画と異なり、母子画指標の出現頻度にも影響を与えると考えられた。また、③母子像の身体接触はないことが多い。そこで、動的母子画における身体接触の意味を明らかにするため、成人版愛着スタイル尺度と動的母子画の比較が行われた。その結果、動的母子画においても身体接触を描くことは他者への信頼感や相互依存的・親和的な心地よい関係を期待する内的作業モデルの存在を示すことがわかったが、動的母子画では身体接触を解釈の着眼点にすることはむずかしいため、さらに表情も加えた検討がされている。その結果、①接触がなくてもsecure高群は笑顔の母子を描くことが多く、笑顔が母子の絆やポジティブな関係を表現している。②secure低群には、母子に接触がなく、笑顔でないものが笑顔のものと同様の出現率でみられた。これは、母子の関係性が希薄な絵である。母子の身体接触がなく、表情も笑顔でない場合、検査協力者の基本的信頼感や対人関係のイメージに問題がないかどうか注意する必要がある。

以上の研究の結果、母子画を動的母子画へと発展させることで、動的母子画では確かに情報量が増えるものの、母子の身体接触という母子画で重要視されていた客観的指標の１つが意味をなさなくなる可能性が示唆された。

４．母子画研究の問題点と母子画に関する今後の課題

以下の６つが母子画研究の問題点ならびに今後の課題として挙げられる。

(1)　研究数の少なさ：これまで紹介してきたように、われわれが調べることができた母子画に関する研究論文は10本と少ない。これは、Gillespie が母子画を提唱してからの期間が短いことが関係していよう。しかし、子育て支援などで早期の母子関係に関心が寄せられている現代では、母子画が利用される領域が広がることが考えられる。したがって、今後さらに研究が積み重ねられる必要がある。

(2)　量的研究を行う上での問題：母子画が投映法として広く利用されるようになるためには、量的な研究が行われ、発達段階に応じた母子画の典型例が示されることが重要である。しかし、母子画のような描画法は、量的に処理することが非常にむずかしく、また質問紙調査と違って多人数から母子画を集めることも容易ではない。もちろんこれまでの研究でも量的に分析が行われているものはあるが、調査参加者数に著しい差があるにも関わらず、質問紙と組み合わせて統計的に分析が行われているものや、統計上の有意差には触れずに考察が述べられているものがあり、質問紙の解析方法や解釈に対しての疑問が残る。今後、量的研究を行う上では、調査参加者の十分な確保や量的指標、解析方法の検討等が必要であろう。

(3)　妥当性：これまでの研究には、質問紙を用いて母子画の内容や妥当性を検討したものが多い。その人の意識面を測定できる質問紙によって母子画の内容や妥当性を検討することはもちろん大切である。しかし、投映法である母子画にはその人の意識面だけではなく無意識面が多く現れると考えられるため、質問紙との比較のみで母子画の妥当性の検討を行うことには疑問が残る。１枚の絵を描いてもらうことでその人の無意識面が見えるということが母子画の臨床場面での利用価値を高めていることを考えると、今後は母子画と同じようにその人の無意識面を見ることができるような他の投映法と母子画とを比較し、母子画の妥当性を検討することが必要ではないだろうか。

(4)　信頼性：ほとんどの母子画研究では、調査者本人のみが母子画の解釈を行っている。しかし、今後は斎藤（2008）のように、母子画の解釈を複数で行うことによって、母子画の信頼性を検討していくことも必要なのではないかと考えられる。

(5)　事例研究の少なさ：臨床場面における母子画の研究については、事例研究の数が少ない。今後、臨床場面で母子画が用いられてその報告が積み重ねられることによって、臨床場面における母子画の有用性の検討が必要になってこよう。

(6)　変法の少なさ：これまでに提唱された描画法には、多くの変法が見られる。例えば、バウムテストであれば２枚法や色づけ法、３枚法などが挙げられる。しかし、これまでのところ、母子画では馬場（2009）の動的母子画しか変法は見られない。変法の存在により、変法と、オリジナルである Gillespie の手法との比較検討や、状況に応じて母子画の手法を選択するといったことも可能となる。さらに、母子画全体の描画法としての精度の向上や、より詳細な情報が得られることが期待できる。したがって、今後はさまざまな変法の創出やその検討が望まれる。

文献

馬場史津（2003）母子画の基礎的研究—成人版愛着スタイル尺度との関係から．臨床描画研究，18, 110−124.

馬場史津（2005）母子画の基礎的・臨床的研究．北大路書房．

馬場史津（2008）母子画による心理療法過程のアセスメント—３枚の母子画の比較．臨床描画研究，23, 196−211.

馬場史津（2009）動的母子画の試み—動的母子画と母子画の比較．中京大学心理学研究科・心理学紀要，８（２），９−16.

Gillespie, J.（1989）Object relations as observed in projective mother-and-child drawings. *The Arts in Psychotherapy*, 16（３）, 163−170.

Gillespie, J.（1994）*The Projective Use of Mother and Child Drawings*. New York：Brunner/Mazel. 松下恵美子・石川　元（訳）（2001）母子画の臨床的応用—対象関係論と自己心理学．金剛出版．

Gillespie, J.（1996）Rejection of the body in women with eating disorders. *The Arts in Psychotherapy*, 23（２）, 153−161.

早川滋人（2006）母子画（DBM）の基礎的研究．滋賀女子短期大学研究紀要，31, 35−48.

松下恵美子・石川元（1999）母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連について．臨床描画研究，14, 43−55.

南里裕美・谷直介（2006）統合失調症患者における母子画の研究—事例を通して．教育科学セミナリー, 37, 101−107.

斎藤みどり（2009）母子画による母と子の関係性の調査研究—愛着から見る意識・無意識的側面．駒沢学園心理相談センター紀要，５，81−86.

鴫原依子（2009）母親の育児不安に関する母子画を用いての研究．桜美林大学院修士論文．

塩崎尚美（2005）保育者の母子分離に対する意識—母子画を用いた保育研修の内容から．相模女子大学紀要，68A, 47−54.